

広島俳句倶楽部

令和二年七月作品集

せせらぎの里 松本恵和

我が山の家は、私のやすらぎの場である。大病を患った後、ここに来ると、不便でも心が休まる。自然がもたらす大きな力だ。ここは、大野山の城外濠跡が残っていて、小川や清水、木々に鳥（虫には少々閉口だが）、孫たちの林間学校である。木の芽や草の芽を摘み、筍を掘り、笹舟を流し、青竹でコップを作った素麺流し。

この野山がもたらす自然との関わりを、ぜひとも次世代へ、繋げてゆきたい。

鶯やデツキの朽葉掃き落とし

たらの芽の棘に朝日の差しにけり

夕暮れてこしあぶらの芽湯搔きをし

県北の山は躑躅の花盛り

せせらぎの音に目覚める立夏かな

農小屋のすぐ裏側の著莢の花

朴の花はらりと苞を落としたる

枹の花雨に打たれて揺らぎけり

雨の夜の夏炉に薪を足しにけり

大杉の上に明るき夏の月

瑠璃立羽わが親指に止まりくれ

明日にはひらく蓮の前に立つ

山法師さつきの女の子が見上げ

我にまたもどつて来たり夏の蝶

大川を越えたところの合歓の花

花合歓に雨の一筋掛かりけり

幹のやや右に傾げる大夏木

近寄れば風の吹きけり大夏木

泳ぎ子の淵見てよりの山路かな

泳ぎ子へしだいに長き山の影

佐保光俊

雨垂れの音を聞きつつ午睡せり

白蓮に午後からの雨降りづく

雨止みて山鳩鳴ける梅雨の朝

閑け放つ窓に簾の揺れてをり

白南風の大鳥居まで歩きたる

その店にアイスコーヒー飲みに行く

夕日差す対岸に楠茂りをり

蜘蛛の圈に蜘蛛は動かず日の暮るる

雲間より城址を照らす梅雨の月

明星の茂れる山に上りたる

村上正人

山畑の崩れしところ茗荷の子

萍の風に吹き寄せられてをり

黒南風の波を進める渡船かな

濃き色のあぢさる増ゆる山の寺

蚊柱の井戸の縁より立ちるたり

本降りの雨に打たれて未草

初蟬の声を聞きつつ顔洗ふ

疫病の収まらぬ世や蟬生る

大西日石油タンクの並びたる

広げたる新聞を這ふ大蜘蛛

あざみ

母少しスープレを余す朝曇

梅雨曇インコ部屋中飛び回る

荒梅雨や齧りて折るる箸の先

グロリオサに近づきて去る夏の蝶

梅雨雲の重なり合うて広がりぬ

梅雨の晴レモングラスの匂ひかな

弁当に一人前の胡瓜もむ

父の日の卓に好物並べたる

音の鳴る靴をはく子や夏の空

夏の夜のひとり見てゐるサスヘンス

亜矢

桑の実を一つ摘みとり口にする

干梅の匂漂ふ廊下かな

川風に玉巻く葛の戦ぎたる

鰯の稚魚かたまり泳ぐ梅雨の川

枝先に枳殻の実のぼつぽと

山桜桃食ぶる幼き日のやうに

田草取る媼と翁散らばりて

学校のフェンスに咲いて凌霄花

抜け殻をつけて蜻蛉のやはらかし

実をつけし大さ蘇鉄を見上げたる

敬子

霞障子灯の入りてなほ雨止まず

大雨となりたる夜半の一夜酒

潮騒のとどく畑や瓜咲いて

一村は川に沿ふなり令歎の花

夏の瀬に足の十指を開きたる

二百段登つてくぐる茅の輪かな

寝ころびし浴衣に吹いて山の風

柚子の景に翅を透かして蟬生る

城涼し川は海へと蛇行して

百段の礎を上れば蟬しぐれ

暁子

かしわもち祖母のてのひら厚かりし

こころもち速く飛ぶ鳥梅雨曇

雨降ればこの傘をさし梅雨の町

五月雨に濡れてどんだん歩きたる

川土手に上り見渡す梅雨夕焼

対岸の灯のゆれてゐる夏至の川

沈みゆく夏の日の照りまさりたる

振りかへり振りかへり見る夕焼かな

夕涼の橋まで行きて戻りたる

風鈴のあるかなきかの風に鳴り

一晚中鳴いて棚田の蛙かな

二階から植田の棚田見てゐるたる

食卓に母と向かひて露を剥く

今年またここに咲きたる玄葵

姉の家池に睡蓮咲いてをり

青田風寺に赤子の生まれたる

麻痺のない方の手で母は茶を揉めり

段畑に色とりどりの手毬花

ふる里に天然鮎の旗ゆれる

田草取り終へ小流れに足つける

夏の蝶軒を離れて飛びにけり

露の葉を叩く雨音してゐたり

梅雨晴間宅急便の届きたる

土砂降りを数歩あるいて蚊に刺さる

朝刊の紙面に跳ねて蠅虎

笹百合に悩みも愚痴も忘れたる

蚊遣火を窓辺に置ける厨かな

蚊遣香輿の部屋より流れくる

風鈴や板の間に猫来てをりぬ

白南風的大海原のうねりかな

高尾ひとみ

ちどり

松本恵和

手紙には芋環のこと書いてあり
一輪の山紫陽花に風の吹く
無人駅裏に石楠花入れてあり
睡蓮の花ひとつ見る日暮かな
ミニトマトひとつふたと赤くなり
寺の門くぐった先の蓮の花
梅を握ぐ手に雨粒の落ち始む
ビルの灯の泰山木の花照らす
月光に紫陽花影を成しにけり
路地入れば百日紅咲く家があり

美耶

暮れてゆく泰山木の花に立つ
入梅の七堂伽藍しづかなり
花うつぎ母にたびたび呼ばれたる
山門へ日傘を畳み入りにけり
山を越え旅する人の日に焼けて
君のさす日傘を遠く見てゐたり
大伯父の昼寝をしては戻りたる
夕立の商店街にメロン買ふ
兄弟のそれぞれに持つ螢籠

桑門わかこ

ひとひらが風に散りたる赤き薔薇
四又路の右のあたりの五月闇
梅雨冷の二度寝に夜具を引き寄せる
夕暮の景裏にとまる夏の蝶
原生林まだらに夏日射してをり
裏道に足を止めたる草いきれ
草茂る中にひとすぢ人の道
沖あたり翳りはじめて驟雨くる

大橋博子

堰を越す流れの上を燕どぶ

夏帽の鏝の下なる舫ひ舟

日御碕麦藁帽の紐を締め

飛び石の丸や四角や松落葉

通信使降りし雁木や大南風

井戸端にひしめいてゐる半夏生

四百年変はらぬ地割糸を取る

電停の熱風のなか子を抱いて

新庄憲彦

スーパ―に青いパイナップルざわわ

ビル街の池に金魚の尾の巨大

夏の夜に人のペン借る宅急便

地下道の全ての灯り蜘蛛が棲む

二階の子降りてくる音大西日

まな板の胡瓜を砕く女子大生

露涼しまた増えているメダカの子

ただ光るホタルに叫び走り飛ぶ

ふじ女

雲透かしはんのり見ゆる梅雨の月

雨上りでて虫帰る野の遠く

白南風や雲一つある嚴島

白南風的大海原へ帆を上げる

冷麦の赤と緑の美味きかな

外へ出て大夕焼を見上げたる

ワイン飲み月下美人の咲くを待つ

蚊遣火をそこに置き庭手入

穂高

薰風に棚田見下ろす能登路かな

めまどひを払うて畦を帰りたる

暗闇に螢を放つ子どもかな

夏休み父と出かけるロードショー

目覚めれば片方に寄り夏布団

たつぷりと曇止め塗る箱眼鏡

夕風にエンジン掛ける船溜

廃校にとどく潮鳴り星月夜

森口良樹

池の面を跳ねて滑つてあめんぼう

牧の木の高きへ飛んで夏燕

ミニトマトテラスに抱いて口にせり

林立の高層ビルに梅雨の月

いとりの咲いて鞭打ち痛みだし

辣蕪をつけたる夕べ雨の降り

大ぶりの茶碗ぬぐふや蟬しぐれ

阿姐

短夜の絶ゆることなき雨の音

寄り添ひて夾竹桃の影に居り

それぞれの高さに草の茂りたる

芝生から頭上を掠め夏つばめ

六尺の甥の恐れる毛虫かな

猪の毘置かれたる木下闇

栄吉

紫陽花の小道を帰る女学生

夏の暁雨音に覚め本を読む

ふる里の夜のしじまに螢とぶ

初蟬の庭の梢に鳴きにけり

自転車の鈴を鳴らして氷菓売

百合の花居間の隅まで香りけり

大畑恵

はうたるのゆつくり門をくぐりけり

さりげなく螢袋の生けられて

雨やんで初蟬を聞く夕べかな

令歎の花カーブの先に見えてくる

百合剪つて生けし御堂の香りけり

雨やみて夏うぐひすの鳴きにけり

紀英子

帰宅して氷菓を舐める子どもかな

干梅の塩キラキラと目を弾く

ラベンダーはどよく咲くを摘みにけり

独り言つぶやく癖の夕端居

錠剤を飲み残してや夏終る

幼名で呼ばるる郷に墓参り

白神陽子

沙羅の花葉をかすめては落ちにけり
地に降りて間をあけて鳴き鴉の子
せせらぎの風がよく吹く令歎の花
月涼し鈴を鳴らして猫帰る
日おもてに凌霄の花散りにけり
片蔭を通りて父母の墓へ行く

松田裕子

港へと続く通りや花葵
夏の蝶庭に來たりて去りにけり
鮎食うて夕暮の道帰りたる
樟青葉枝の鴉の近きかな
鰻屋の軒に遅れし友を待つ

井藤希

朝からのそば降る雨の梅雨の入り
じやが芋を妻と握り出す梅雨晴間
天の川芭蕉の旅の孤独かな
軒先に吊るして赤し唐辛子
風一陣秋暑の街を吹き抜ける

英一

城壁の石の匂や大西日

とりどりの色寄せ植ゑに百日草

梅雨の朝水の増したる手水鉢

蚊遣火は昭和の香り風吹けり

昼寝覚水一息に飲み干せり

梅雨の雨降り込んでゐる池の舟

どことなく体のだるき夏の夜

二股に分れてゐたる夏大根

茄子の実の艶の黒さに見入りたる

吊革に身をゆだねたる秋暑かな

地ビールを飲み干し夕餉始まりぬ

高き松夏の燕のすり抜ける

上下してやがて並びて赤とんぼ

いつもより友饒舌や蚊遣して

ほととぎす鳴声のよく響きけり

友岡葉山子

撫子

宮田保江

夕暮の白南風の橋渡りたる

奥出雲頭上から降る蟬時雨

裏木戸に蟬の脱け殻祖母の庭

外つ国の孫に送りし蟬の殻

遠藤さつき

うたた寝に初蟬の声聞いてをり

白南風に大きく鯉の跳ねにけり

人肌となるまで抱いて一夜酒

夏の蝶百景箱を越えて飛ぶ

熊谷ゆり子

蚊遣火を腰にくゆらせ庭仕事

長椅子に二つ置きたる蚊遣香

蚊遣香縁側伝ひ流れたる

何となく夕顔の香に角曲がる

みさ子

帰り道白百合見つめる瘦男

暑き日に友と二人で乾杯す

海の中魚が見える島の夏

阿波久

南風窓を開けば入るなり

雨降れば流るる滝となりにつけり

さくらんぼひときは赤く輝けり

かこ

蚊遣火のゆるりふはりと上りたる

蚊遣香部屋に流るる煙かな

蓮の景の露あちこちへ走りけり

民

大南風スカート一枚試着せり

十の目の見つめてゐるたる蟬の羽化

鈴植の朝顔の白多きこと

ちかこ

朝練の駆け抜ける子の汗光る

炎天や一息入れて踏み出しぬ

蚊遣火を置いて縁側風もなし

幹

白南風や竿いっばいにシーツ干し

「準備中」大き鯨桶干してあり

蚊遣して碁を打つてゐる祖父と孫

やす保

青藤吊つてうとうとしてゐたる

蚊遣り焚き夕餉の支度はじめたる

津田玲子